

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04691

研究課題名(和文) 大学教授職の専門職らしさの探求 - アカデミックネス概念の構築と検証

研究課題名(英文) Envisioning the concept of 'academic-ness' in exploring academic profession

研究代表者

佐藤 万知 (Sato, Machi)

京都大学・高等教育研究開発推進センター・准教授

研究者番号：10534901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多様化する大学教員の職務やキャリアパスに着目し、大学教員の専門職らしさを探求することを目的とした。ウェブ調査やインタビュー等を通じて、社会からは大学教員は「教育」「研究」の双方を担う専門職であるというイメージを持たれていることが明らかとなった。一方、教員は他者に対して専門知に関してあるいはそれをを用いて対話することを大学教員らしさとして認識している。このことから、いわゆる授業実践としての「教育」や論文執筆としての「研究」だけではなく、より拡大した解釈で「教育」「研究」を捉えることにより、より実態に近い大学教員らしさを把握できると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義の一つは、大学教授職という専門職について、社会はどのようなイメージを持っているのか、すなわちどのような役割を果たすことを求められているのか、という視点で調査・分析をし、改めて社会における大学教授職の意義を問うたことにある。大学教授職については議論が内向きになる傾向がある中で、社会という視点を取り入れ議論の幅を広げたことは、今後の大学教員のあり方を社会をも含めて議論するための第一歩として社会的意義もあるであろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to identify what constitutes an academic profession, which has been rapidly diversifying and changing during the past decades. Based on our web-survey, interviews, and data-analysis, we find that the general public see education and research as integral part of academic professions, and academics themselves indicate the importance of being involved with knowledge transmission and production of some sorts. We argue that by unpacking and redefining education and research to include broader activities, we might be able to capture and understand the characteristics of academic professions.

研究分野：高等教育研究

キーワード：大学教授職 アカデミック・アイデンティティ 大学教員らしさ 教育と研究 スカラシップ

1. 研究開始当初の背景

大学教授職を巡っては、大学の大量化、大学評価の本格化、大学に対する要求の多様化、情報技術の革新、科学の変容などを背景に、大学教員が担う職務や雇用形態の多様化と役割細分化が進んでいることが各国で指摘されている (Schuster and Finkelstein 2006, McInnis 2000, Coaldrake 2001)。

日本に限らず、欧米など高等教育の先進国においても、大学教授職の多様化が進んでいる。例えば、知識の商業化や研究成果の還元という文脈から産学連携や大学初ベンチャー企業の創業が促進される中でいわゆるアカデミック・アントレプレナーという役割が位置づけられている。あるいは、教育活動における教育テクノロジーの活用への要求が高まる中で、それを支援する役割を担うインストラクショナルデザイナーや教育テクノロジスト等が創出されている。このような多様化する大学教授職の現状を捉えようと、特定の役割のみを担うアカデミック・スタッフを”para-academic”と称し、大学教授職に対する影響を検証する試みや (Macfarlane 2010) いわゆる学術的な職務と組織的な職務の間に関わるような職務を担うスタッフを”third space professionals”という新しい概念で提示し、これらスタッフのキャリアや専門性、組織的位置付けにおける課題等を検証する試みもみられる (Whitchurch 2008)。

このような職務内容の実態に着目すると、もはや、多様化した役割を担う大学教員を同じ職業として語る事が困難な状況となっている。また、いわゆる伝統的な大学教授職が担ってきた主たる活動 (教育、研究、専門的サービス) が昨日別に分化しつつある現象も指摘されており (Finkelstein and Schuster 2001) 大学教授職の細分化が進んでいると換言できる。

それでは、大学教授職という専門職は、今後、多様化・細分化され、複数のアイデンティティを持つ大学教授職として分類されていくことになるのであろうか。それともこれらの多様な形態の大学教授職にも共通性を見出すことは可能で、一つの専門職として考えることが可能なのだろうか。そのような共通点を見出そうとすることは無意義であろうか。今後、大学教授職をどのような専門職として位置付けていくのか、ということを考えることは、大学教員組織のあり方、大学教員養成の場である大学院のあり方などに大きな影響を与えようと考えられる。

参考文献

- Finkelstein, M. and Schuster, J. H., 2001, “Assessing the Silent Revolution: How Changing Demographics Are Reshaping the Academic Profession”, *AAHE Bulletin*, 54: 3-7.
- Schuster, J.H., Finkelstein, M., 2006, *The American faculty: The restructuring of academic work and careers*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- McInnis, C., 2000, Changing academic work roles: The everyday realities challenging quality in teaching, *Quality in Higher Education*, 6(2):143-152.
- Coaldrake, P., 2001, “Rethinking Academic and University Work”, *Higher Education Management*, 12(2):7-30.
- Macfarlane, B., 2010, The Morphing of Academic Practice: Unbundling and the Rise of the Para-academic, *Higher Education Quarterly*, 65, 1:59-73.

2. 研究の目的

本研究では、大学教員の専門職らしさ、すなわち、内面化されている態度や倫理・価値観、信念、アカデミック・アイデンティティに着目し、これらを「アカデミックネス」という造語を用いた新しい概念枠組みによって提示することを目的とする。これにより、既存の大学教員研究に対して新しい視座を提供すると同時に、一般の大学教員が当事意識を持って自らの専門職について議論することを活性化することへの貢献を目指す。

3. 研究の方法

定量的アプローチ:

「大学教員イメージ調査」として2018年8月にウェブ調査を実施した。本調査では、大学教員以外の人々が大学教員の仕事に対して抱くイメージの一端を明らかにすることを目的とした。調査会社 (マクロミル) に委託し、四年制 (六年制を含む) 大学を卒業した25~39歳の日本在住の調査モニターで、現在は学生ではない者、大学に勤めていない者を対象にした。

定性的アプローチ:

- (1) 写真投影法: 大学教員が自らのアイデンティティをどのように認識しているのかについて、写真というツールを用いて探求した。具体的には、調査協力者に「自分が大学教員らしいと思う行動」について写真を撮影してもらい、その写真を用いながら、認識について話をきくという写真投影法を用いた。写真投影法は、心理学の分

野で開発された手法で、言語化されない認識を抽出するのに適している手法とされている。

- (2) 大学教員らしさ聞き取り調査：大学教員の役割細分化を組織的制度として導入することに対するについて、オーストラリアの教育専任教員制度を今後の大学教員のあり方のシナリオとして示し、聞き取り調査を実施した。

実験的検証：

研究代表者が実行委員長となって、International Academic Identities Conference 2018 を広島大学開催し、大学教員らしさについて、様々な国の文脈を超えて議論する場を設けた。また、研究グループとしても、シンポジウムを企画した。

4. 研究成果

本研究は、一般の大学教員が当事者意識を持って自らの専門職について議論することを活性化することへ貢献することを一つの目標としていた。これについては、2018年に広島大学を会場として International Academic Identities Conference を開催し、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、香港、韓国、日本などより90名超の参加者を迎え、様々な議論をすることができた。学会期間中、会場近辺に近隣の方の協力を経てアカデミック・マルシェを開催することで、IAICの参加者以外の大学関係者にも場を開放し、こういったテーマでの議論の存在に触れてもらうきっかけとしてもらうことができた。各国において、大学教員の仕事、大学の役割についての問い直しが現場レベルでおきており、その現場にいる当事者として、我々はどういった大学という場を育てていきたいのか、といった議論がなされた。

学術的には、まず、大卒者ウェブ調査の結果においては、教育と研究のいずれかをになう分業型の教員を「大学教員にふさわしい」と認める割合が一定数あったが、全体として、教育と研究の両方を担う大学教員像をより「ふさわしい」と判断する傾向が確認された。調査結果については、名古屋高等教育研究に論文が採録されている（丸山ら 2020）。

定性的調査で、写真投影法調査においては、専門知識を用いて他人と関わる様子を切り取るような写真が撮影されており（学生とのディスカッション、授業風景、講演風景、共同研究の様子など）、大学教員の認識において、いわゆる授業を行う教育活動や論文を執筆する研究活動だけでなく、より広く知の発信や創造活動に関わることが、大学教員らしい活動として認識されていることが明らかとなった。同時に、大学教員らしさが他者との関わり合いを通じて表現されるものとして捉えられていることが明らかとなった。

大学教員らしさ聞き取り調査においても、大学教員のポストを教育担当、研究担当、教育研究担当、マネジメント担当に分類し、異なる教員評価やキャリアパスの仕組みを導入しているオーストラリアの事例に対して、一定の理解をしつつ、日本での導入については否定的な意見が多く見られた。しかし、分野によって様々な現状があり、それにより反応が異なることも明らかとなっている。例えば一部の分野では、教育をすることが研究活動を一緒に担う人材を育成することに直結しているため教育と研究を分離することは不可能、というような意見が出された。異なる分野では産業界の方が技術の発展スピードが速いためにそういった内容については、大学教員よりも主に教育を担当する実務家教員の方が適している、といった限定した内容で分離を肯定するような意見もみられた。これらの結果は International Academic Identities Conference 2018での発表と、名古屋高等教育研究に論文が採録されている（佐藤 2020）。

新型コロナウイルスの影響により、最終年度の議論の場として予定していた International Academic Identities Conference 2020 がキャンセルとなり、計画の見直しが必要となった。また、定量的・定性的研究からアカデミックネスという概念を構築する予定であったが、議論を深めるうちに、ポイヤーの論じる Scholarship 議論との違いが曖昧になってきた部分があり、概念構築にはさらなる検証が必要であるという結論に達した。

そこで、本科学研究により得た知見を基盤として、新たに「大学教授職の役割分化の実態と論点の整理：日豪の教育担当教員を事例に」を研究プロジェクトとして立ち上げ、2021年度科研費基盤研究Bとして採択された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐藤万知	4. 巻 20
2. 論文標題 大学教授職の役割細分化現象と課題ーオーストラリアの教育担当教員を事例にー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋高等教育研究	6. 最初と最後の頁 213-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸山和昭, 佐藤万知, 杉原真晃, 立石慎治	4. 巻 20
2. 論文標題 教育と研究の分業と大学教員としての「ふさわしさ」ー大卒者ウェブ調査の結果からー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋高等教育研究	6. 最初と最後の頁 91-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤万知 杉原真晃 立石慎治 丸山和昭
2. 発表標題 大学教員のアイデンティティに関する探求：写真投影法を用いた探求的検討
3. 学会等名 第40回大学教育学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Machi Sato, Shinji Tateishi, Masaaki Sugihara, Kazuaki Maruyama
2. 発表標題 What do we share as academics? Constructing 'academicness' as a new concept to capture shared values, identity and culture among diverse academic professions
3. 学会等名 International Academic Identities Conference 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山和昭 佐藤万知 杉原真晃 立石慎治
2. 発表標題 大学教授職における役割の多様化と細分化 大学教員イメージ調査にみる大卒者の認識から
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丸山和昭
2. 発表標題 実務家教員の教育と研究はなにか
3. 学会等名 日本実務教育学会設立記念研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 立石 慎治 小方 直幸 谷村 英洋
2. 発表標題 専門職大学・専門職短期大学の教職員組織と教育課程
3. 学会等名 第97回九州教育社会学研究交流セミナー
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	立石 慎治 (Tateishi Shinji) (00598534)	筑波大学・教育推進部・助教 (12102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丸山 和昭 (Maruyama Kazuaki) (20582886)	名古屋大学・高等教育研究センター・准教授 (13901)	
研究分担者	杉原 真晃 (Sugihara Masaaki) (30379028)	聖心女子大学・現代教養学部・教授 (32631)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 International Academic Identities Conference 2018	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関